

教育博物館の話

教育学部 三好信浩

広島市の市制百周年記念事業の一環として『広島市学校教育史』の編集を依頼され、研究室の仲間と協力してようやく一書にまとめることができた。

広島における最初の官立学校は、明治35(1902)年創立の広島高等師範学校(広島高師と略称)である。政府が第2高師の計画を発表すると、京都市などが誘致に動き出し、広島県と広島市は多額の資金をきよ出すことでもって、その誘致に成功した。その際、広島に高師が出来れば、教育文化の水準が大いに向上するであろうという期待がこめられていた。

地元の新聞によれば、まず第1に高師のもたらすであろう文化的影響が挙げられた。「品位と智識を有せる学者教育家の錚々たるものが少なくとも百名内外広島市に入込むものとせば、之に依り其四辺に及ぼさるべき感化は蓋し尠少にあらざるなり。」という。また第2に、附属学校のもたらす普通教育への影響が予想された。模範的な附属中学校が出来れば、「他の県立中学校も自然と之を模範とするの傾きを生じ、追て之れと競争の勇気を惹き起すは当然の事にして、直接と間接とを問はず人物養成の上に於て、将た学芸研磨の上に於て、益する所多々なるべきは何人と雖も得知すべきなり」というのである(『芸備日日新聞』明治33年3月4、6日)。

広島高師と附属学校は、そのような市民の期待にこたえるだけの実績を挙げた。日清戦争において大本営が置かれ、「軍都」として栄えてきた広島市が、やがて「学都」とも呼ばれるようになった裏には、広島高師の貢献があった。広島には「高師文化」の花が咲き

市民もそれを享受することができたからである。2つだけ例を挙げよう。

その1は、丁未(ていみ)音楽会である。明治40年(1907)年の干支(えと)にちなんで命名されたこの音楽会は、広島高師の音楽担当教官が高師生徒と相はかって結成したもので、会則の第1条には、「本会は音楽の理論及び技術を研鑽し、其教育的価値を發揮し、併せて音楽趣味を社会に普及せんことを力むるを以て目的とす」とうたった。丁未音楽会は毎年演奏大会を催して市民にも公開し、のちには市民も賛助出演するようになった。

その2は、ペスタロッチの夕(ゆうべ)であって、広島高師で盛んに進められたペスタロッチ研究の成果が市民にも披露された。大正11(1922)年から第1回の講演会が催され、大正13(1924)年の第3回講演会について報じた地元新聞の記事では、「広島高等師範学校ペスタロッチ研究会にては、一昨十七日ペスタロッチの命日に当るを以て其の故人となった大教育家を偲ぶ為め午後七時より同校講堂に於いてペスタロッチ祭大講演会を催したが、多数の参観者は斯界の諸大家の講演に依り、逝きし聖ペスタロッチの面影を忍び業績を偲んで、十時過ぎ緊張した空気の静けさの間に真面目な囁きを残しつつ盛会裡に散会した」とある(『芸備日日新聞』大正13年2月19日)。このころから広島高師は日本におけるペスタロッチ運動の中心地となった。同校の教育博物館には、ペスタロッチ室が設けられ、肖像画や関係図書などが集められた。

広島高師はこのような諸行事だけでなく、その施設を市民に開放して地域社会に奉仕した。まず最初に行ったのは、附属図書館の公

開であって、国立学校の図書館の公開は初めての事例であるだけに、明治41（1908）年4月17日の「官報」に詳しく紹介された。すなわち、「広島高等師範学校ニ於テ本月一日ヨリ其図書館ヲ公開シ公衆ノ閲覧ヲ許スコトトセリ。其公衆閲覧規則及去月三十日公開披露ノ席ニ於テ同校図書課長教授野田義夫ノ為シタル演説ノ大要左ノ如シ」とし、「広島高等師範学校図書館公衆閲覧規則」と野田義夫の「図書館公開ノ辞」が載せられた。

広島高師が地域社会との連絡を図る目的で設けたさらに重要な施設が、ここで紹介しようとする教育博物館である。図書館公開より8年後の大正4（1915）年11月に開館された。その発端は、大正2（1913）年に広島高師の初代校長で創業に寄与した北条時敬が東北帝国大学総長に転出するに際し、その頌徳記念事業として記念館設立が企画されたことにある。

この当時、東京高等師範学校には附属教育博物館があり、本郷区湯島に敷地4110坪、建物397坪、図書9192冊、校具1万1351点、職員6名という大規模な施設を誇っていた（『東京高等師範学校一覽』）。これは、明治5（1872）年3月に文部省の設置したものを譲り受けたものであって、開館当初は、「近代教育の幕あけを告げる最新情報の開かれたセンター」として、日本教育の近代化に大きな役割を果たしたものである（石附実『教育博物館と明治の子ども』）。

これに対して広島高師の教育博物館は、関係者の寄附金によって自力で建設されたところに違いがある。推進主体は尚志同窓会であって、かつて附属学校が仮校舎として使用していた旧土本監督署の建物を教育博物館に転用するとともに、それに隣接して北条前校長を記念する永懐閣を新築して母校に寄附し、教育博物館の所用となした。

招待を受けて館内を視察した新聞記者の記事によると、教育博物館は図書館とともに「前校長の遺志」であること、「総てが研究と云ふ事を本位として構成されたもの」であるこ

と、「孰れも高師と云ふものを透して居ると云ふ事は勿論であるが、一面広島教育界の活動的意義を網羅して居る」こと、本館南部の建物の階下は集会室に当てられ、「教育者が社会の連絡をも取ると云ふ便宜を得べく館には此の集会室も設置されて、教育者相互に又教育者と社会との連絡を密接にすべく会食をも為し得る様に構成された」ことなどが、その特色として挙げられている（『芸備日日新聞』大正4年12月8日）。

大正5（1916）年9月には「広島高等師範学校教育博物館規程」が制定された。全8か条から成り、その第1条では、「教育博物館ハ教育ノ学理及實際ニ関シ研究ヲナシ、且ツ諸般ノ教育品ヲ陳列スル所トス」とされ、その第2条では、本館に研究部、考案品部、参考品部の3部を置くとし、「研究部ハ教育ニ関スル図書及諸器械ヲ藏置シ教育ノ研究ヲナスモノトス」「考案品部ハ本校、附属学校及一般ノ教育上ノ考案品ヲ陳列スルモノトス」「参考品部ハ更ニ之ヲ別チテ本校参考品部、附属中学校参考品部、附属小学校参考品部、一般参考品部トシ、本校附属学校及一般ノ教育上ノ研究物並ニ参考品ヲ陳列スルモノトス」とされた。第5条では、「本館ハ公衆ニ対シテ無料ニテ観覧ヲ許シ、又希望ニヨリ第一条ノ研究ヲナスコトヲ許ス」と公開の原則を示し、さらに加えて第7条では、「本館ハ教育上ノ問題又ハ教育品ニ関シ質問ヲナシ若クハ批判ヲ乞フ者アルトキハ成ルベク之ニ応ズベシ」と、一般の質問にも答えることにした（『広島高等師範学校一覽』）。

教育博物館建設を発起した尚志同窓会の機関誌には、広島高師英語科教授牧一（まきいつ）の記した「教育博物館の話」と題する記事が載っている。牧教授は広島高師を卒業後アメリカに留学し、海外の教育事情に通じていた。彼は、カナダのトロントの博物館をはじめ世界の代表的な教育博物館について紹介したあとで、「我国に於ても従来東京に唯一つ存在したのみで誠に寂寞を感じて居ったのであったが、愈々今回吾等の母校に於て此

の拳に出で茲に我が国の一般教育界に新しき光彩を加へることになった」ことを悦んでいる（『尚志同窓会誌』第19号、大正4年7月）。

東京に唯一存在していたというのが、上記の東京高等師範学校附属教育博物館であって、文部省がそれを創置した時にはトロントの博物館を参考にしていて、東京高師の附属施設となったのは、明治22（1889）年からであり、大正4（1915）年には同校から分離して再び文部省の直轄に戻っている。大正10（1921）年には教育の名称をはずして東京博物館となり、今日の国立科学博物館へとつながっていく。広島高師のそれは、広島文理科大学創設時に一旦閉鎖されたが、昭和9（1934）年1月からは広島文理科大学附属教育博物館として再開された。

広島高師の教育博物館は各種の行事を主催したが、その1つに教育講習会がある。昭和2（1927）年に開催した第5回教育講習会を例にとってみると、「新教育令に基く手工教育講習会」と称し、小学校教員を会員として4日間の行事を組んでいる。そのプログラムは、「講演」「特別講演」「会員研究発表」「児童作品並ニ手工実習用具展覧」の4部に分かれていて、講演者6名の中には、広島高師のベスタロッチ運動の指導者長田新も含まれ、「ベスタロッチの劳作教育論」が演題とされた。特別講演は、高師校長吉田賢龍の「行の教育」と高師教授新見吉治の「産業革命と手工業」の2題であった。参加会員も1人10分の研究発表を許され、高師および附属学校の教官とひざを交えた討論が行われた（『尚志』第87号、昭和2年6月）。

広島に設けられた第2番目の官立学校は、大正9（1920）年開校の広島高等工業学校である。その際も地元から多額の寄附金が支払われた。そのこともあって、同校もまた広島高師と同じように地域社会への奉仕につとめた。熊本高等工業学校長川口虎雄が創業の衝に当たり、初代校長に就任した。川口校長は大正10（1921）年5月の開校式の日に、「対地方的関係としては学校が為し得る範囲内に

於て地方工業の発達に微力を致すの心掛けが無ければならぬ。そこで学校では能う限り開放して、一般人の来観に便し、研究に資し、次第に依っては研究調査の相談に応ずる考えで以て、僅少たりとも地方の裨益となり得んことは学校の希望する所である」という談話を発表している。（『広島大学工学部50年史』）

広島高等工業学校は川口校長の方針どおり学校開放を進めた。同校の創立10周年の記念要覧を見ると、講演、講習、展覧などの行事が催されている。たとえば大正10（1921）年から始まった展覧会は、「地方人に対する工業常識開発の目的を以て相当に準備し、全校を開放して縦覧に供す。人気頗る盛大に向ひ広島市内年々の行事として今や屈指の数に入れり」と報告されている（『創立第拾年記念要覧』）。広島高師のように常設の施設こそなかったにせよ、学校公開という形で地域の産業界と結び合った。

戦後の広島大学において、広島高師の教育博物館に類する施設として挙げられるのは霞地区の医学資料館であって、広島における医学の発達に関する諸種の貴重な資料が展示されている。他の大学にもこの種の立派な施設を整えているところがある。たとえば、東京工業大学の正門を入るとすぐにモダンな百年記念館の建物が目を引く。中には各種の会合に便利な部屋のほかに、同校の沿革にかかわる展示室や資料調査室もあり、学位を持った専門のアーカイビストが応待してくれる。大学アーカイブというものは欧米の著名な大学ではどこにでもある施設なのである。

西条キャンパスには、大学会館が設けられることになっているし、文学部は独自に研究資料館を設ける予定であると聞く。広島大学の歴史に関する資料が集められ、整理され、展示されるアーカイブの設置は当然のこととして、さらに加えて、最新の研究成果が地域社会に公開されるようなセンターが欲しい。広島高師の教育博物館の精神を現代によみがえらせたいためである。